

# やわたにし 八幡西遺跡 (第2次)

遺跡番号	382-172
調査次数	第2次
所在地	山形県東置賜郡川西町大字西大塚字八幡三
北緯・東経	38度2分40秒・140度3分41秒
調査委託者	国土交通省東北地方整備局山形河川国道事務所
起因事業	一般国道113号梨郷道路事業
調査面積	3,500㎡
受託期間	平成29年4月1日～平成30年3月31日
現地調査	平成29年5月12日～9月22日
調査担当者	菊池玄輝(現場責任者)・後藤枝里子・色摩優吾
調査協力	川西町教育委員会・置賜教育事務所
遺跡種別	集落跡
時代	奈良時代・平安時代・江戸時代
遺構	竪穴建物・掘立柱建物・柵・柱穴・土坑・土葬墓・溝・濠・自然流路・水田・水場
遺物	土師器・赤焼土器・須恵器・陶磁器・土製品・石製品・金属製品・木製品等(文化財認定箱数:37箱)



遺跡位置図 (1:50,000)

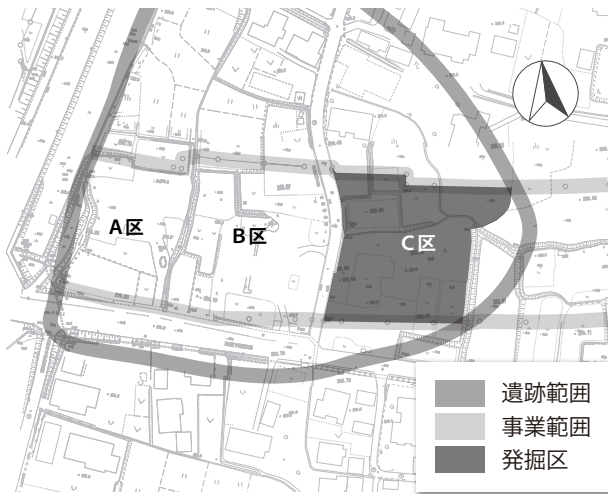


図1 発掘区概要図 (1:6,000)

## 調査の概要

八幡西遺跡は川西町北端の郊外(大字西大塚)に所在する(遺跡位置図)。遺跡は、整備が進む「新潟山形南部連絡道路」(国道113号バイパス事業)の一部区間「梨郷道路」に当たり、平成25年度の元宿北遺跡、同26年度の八幡一遺跡に続き、計画路線部分の発掘調査となった。昨年度の第1次調査は遺跡を縦断する町道の西側(A・B区)を、今年度の第2次調査ではその東側(C区)を調査した(図1)。当該事業に伴う八幡

西遺跡の発掘調査は今回で終了となる。

## 遺構と遺物

昨年度のA・B区と同様、今年度のC区でも北側(微高地)と南側(緩傾斜の低地)の微地形の差異が確認できた。ただ、遺構の分布が希薄だった南側の低地にC区ではむしろ遺構が密集し、後述する近世の時代には屋敷地の中核となるようだ。湿潤で不安定な立地の制約にかかわらず、別の意図で土地を選定しているのだろうか。

以下では現段階の理解ながら、推定した時代別に代表的な遺構(・遺物)について説明する。

まず奈良・平安時代(古代)では、微高地上に竪穴建物2棟と掘立柱建物3棟の各単位が点在する。

竪穴建物(ST1730)はC区中央に位置し、平面形は隅丸長方形で、大きさは長軸長5.7m・短軸長4.1m・深さは50cmを測る。柱穴など建物を構成する要素は検出できなかったものの、竪穴南東隅から外に向かって延びる排水溝が見つかった。排水溝は古代では工房(非居住施設)での発見例が目立つことから、日常生活に伴う自然排水だけではなく、手工業生産の過程で生じた汚水処理用の可能性も考えたい。

掘立柱建物は3棟(SB2912・2913・2915)見つ

かり、いずれもC区北東端にまとまる。

SB2912は桁行<sup>けたゆき</sup>2間以上・梁間<sup>はりま</sup>2間の推定南北棟で、桁行は発掘区外へ続く。柱<sup>はしら</sup>間寸法は桁行が6.0尺等間、梁間は7.5尺の等間である。SB2913は桁行3間・梁間2間の南北棟で、建物中央を近世の屋敷<sup>ぼり</sup>濠に壊される。柱間寸法は桁行が5.5～6.5尺、梁間は8.0～8.5尺とややばらつく。SB2915は桁行3間・梁間1間の東西棟で、柱間寸法は桁行が5.8～7.7尺、梁間は12.8尺等間である。これら3棟は広めの間尺<sup>まじやく</sup>を基調とし、主軸方位が真北<sup>しんぼく</sup>からやや西に振れる点で一致する。

竪穴建物群と掘立柱建物群の間に柵や溝などの区画施設はないものの、その位置関係から、それぞれ生活単位としての独立性が認められるかもしれない。

一方、江戸時代（近世）になると当地に規則的な配置が生まれる。方格状の地割に基づく屋敷の成立である。これは外郭を濠で方形に<sup>いによう</sup>圍繞し、その内部に複数の掘立柱建物や柵、水路や水場（木組み）などを伴う。区画北辺には平行する二重の濠（SD1001・1732）が巡り、東辺に当たる濠（SD1501）と直交し接続する。これらは上幅3.0m弱、下幅は0.4～1.4mで、深さは1.5mを測る。濠割の内部空間は埋没した湿地帯と重なるものの、地勢にかまわず約500個の柱穴が密集し、掘立柱

建物10棟弱、柱<sup>ちゆうけつ</sup>穴列（柵）3列ほどの組合せが見込まれる。中でも掘立柱建物（SB2901）は桁行8間・梁間2間の身舎<sup>みや</sup>に片平1間の<sup>かたびら</sup>廂<sup>ひさし</sup>が付く長棟<sup>ちやうとう</sup>建物で、規模からして屋敷の主屋と考えられる。また、掘立柱建物（SB2904）は構成する柱穴<sup>ちゆうこん</sup>で柱根が全て遺存する。木製遺物の残りの良さはこの遺跡の特性だが、洗い場と目される水場遺構（SK1565）などでも方形の木組みや柱根が数多く残っている。木製構造物とセットの遺構からは、当時の生活の様子が生々しく具体的に見えてくるようだ。

そのほか、濠（SD1001）以北の空間は屋敷地の外界とみられるが、北辺中央寄りの位置で、並列する2基の土葬墓（SK1125・1126）が見つかった。いずれも木棺直葬<sup>じきそう</sup>で、棺内からは六道銭<sup>くわんない</sup>のほか、一方から煙管が、もう一方からは紅血<sup>べにざら</sup>や有機質<sup>きりこだま</sup>の切子玉が出土し、被葬者の性格の一端がうかがわれる。敷地の北側に守り神として供えた先祖の屋敷墓だろうか。

#### まとめ

この2か年で遺跡全体の約50%を発掘調査したことになる。今後は古代の遺構・遺物を中心に調査成果を整理・分析し、遺跡の形成から廃絶に至る変遷過程の解明に努めたい。



写真1 C区俯瞰（南東から）





写真2 近世屋敷地 垂直（上が北）





写真3 SD1001 灯明皿出土状況



写真4 SK1125 土葬墓 (西から)



写真5 SK1126 土葬墓 (西から)



写真6 SD1001 濠木製遺物出土状況 (東から)



写真7 SB2912 掘立柱建物 全景 (南から)



写真8 SK1565 水場遺構 全景 (北から)



写真9 SB2904 掘立柱建物 全景 (北から)



写真10 ST1730 竪穴建物 全景 (北から)